見眞大師

特47
813

帝國圖書館藏

極かに指を折て數ふれば我等を生死の苦海に救濟し給へる聖親鸞
御忌第六百五十年に先立つと今や正に十年吾人聊か感なからんや
吾人既に鴻恩を受く吾人は何を以てか之に報ひん聖人の和讃に曰く
如來大悲の恩德は　身を粉にしても報ずべし
師主智識の恩德も　骨をくだきても謝すべし
去なる哉粉骨碎身以て之に報ふべき鴻恩は唯口に稱ふる南無阿彌陀
佛の一法にて之を報謝申すべかりける
本書卽ち念佛の餘音なり見る者爲に敎に浴せよ希くは相共に率ゐて
吾人の目的地なる至善に到達せんことを以て序となす

明治卅四年十一月三日

在東京巢鴨
著者　識

見眞大師

在東京　舟橋水哉著

明に无漏の慧燈をかゝげて、遠く濁世の迷闇をてらし、普く甘露の法雨をそゝぎて遍く枯渇の凡慮を潤ほし給ひしは實に我宗祖親眞大師其人に非ずして果して誰ぞ。まるべなき我等孤兒を生死の苦海に救ひ、大悲の願船に帆を擧げて、彌陀の御國へ着かせ給ひけるは、豈に我宗祖親鸞聖人の功績ならずや。嗚呼我等は、見眞大師の降誕に因て、他力の信心を獲得し、念佛する身となるを得たり。嗚呼我等は、親鸞聖人の出現に依て、現當二世の大益に預り眞の人となるを得たり。茲に野生、聊か鴻恩に報いんため、伏して靜に見眞大師

の功德を懷ひ奉る。

第一　聖人の生涯　その上

我邦中古、傳敎大師現はれて天台の一心三觀を傳へ、弘法大師出でゝ眞言の三密觀を唱ふ。以來幾多の星霜を經て、平安朝の佛敎漸く廢退し、之に加ふるに爭亂相續き、濁れる世界は愈亂麻の如かりき。此時に當りて、元祖法然上人先づ佛の正意を明にし、淨土他力の念佛を唱へ給ひしかば、眞宗の法運は方に其曙光を漏し、延て親鸞聖人の降誕を促せり。そも高倉天皇安元元年、元祖四十三歳にして、一心專念彌陀名號等てふ、善導の散善義の文字に大悟する所あり、忽ち五濁惡世の闇夜には、天台眞言の花を捨てゝ、四十八願の月を弄ぶべきことを證得し給ひき。其後九條關白兼實の請に依て、選

擇本願念佛集を撰述し、其三心章私釋に至て、實に下の如く記し給へり、

生死の家には疑を以て所止となし、
涅槃の城には信を以て能入となす。

かゝる元祖の正意を承けて、之を大成したる偉人は果して誰ぞ。偉人出でずんば果た此敎を如何せん。惟ふに偉人とは卽ち是れ我宗祖見眞大師其人なりとす、言を換ゆれば元祖上足の門下聖親鸞是なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

聖人は、高倉天皇承安三年四月一日京都に生る、藤原有範の子なり。幼名を松麿と名け、四歳にして父を失ふ。八歳にして更に其母を失ひ、哀慕の情轉禁じがたく、漸やく脫塵の志あり。明年九歳の

春、終に青蓮院慈圓慈鎭和尙の門に至りて出家得度し、範宴少納言の公と號けぬ。嗚呼九歲の貴童、尙ほ且つ世の不幸に遇ひて、切に無常の理を觀じ、あすをも知れぬもろき命にてあらばこそ、其夜直に出家得度し給ひて、世の俗塵を脫したりけれ。されば聖人の資格より云へば、朝廷に仕へて霜雪をも頂き、射山に趨て榮華をも開くべかりしが、興法の因內に萠し、利生の緣外に催ほしゝに依て、九歲の春の頃、聖人は紫の花さく藤原の里を出でゝ、眞如の月さやかなる沙門の池塘にさまよひぬ。惟ふにかゝる聖人の脫塵は、やがて我等が救濟せらるべき法水の流れ出づる素因にてぞありたりける。

聖人は既に脫塵の沙門となれり。身を比叡の學林に托して、研精ならひなく、或は炎夏の短夜には、螢を聚めて車胤が古事を訪らひ、或は玄冬の寒夜には、雪を携へて宣玉が舊儀を試み、切瑳琢磨こゝに十年、更に南都に赴きて、三論法相諸宗の學を研き、次で復叡山に歸り給ひぬ。偶聖人深く心に感ずる所あり、頻りに東西の諸塔に入りて諸佛菩薩に祈願し、諸天善神に冥助を仰ぎ、心を苦めて專ら出離の要道を求め、世榮を避け、隱遁を希ふの情漸く深かゝりしが、途に聖覺法印に遇ひて、法然上人の易行念佛を傳導せられつゝあるを聞き、明日直に法然上人に吉水の禪室に謁して、其敎を蒙り名を綽空と改めて、忽ち淨土敎裡の聖人と轉じ給ひけり。正に是れ土御門天皇建仁第一の曆春の頃、聖人二十九歲の出來事にぞありし。

吉水の御房は聖人に向て、ことに宗の淵源をつくし、敎の理致を究めて、他力念佛の敎義を說き給ひければ、聖人の聰明忽ち他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定して、我等得生の摸範をぞ示しける。又聖人は建仁三年兼實の女玉日を娶り、俗に

投じて肉食妻帯を爲し、大に平民的宗教を鼓吹したりしかば、爾以て我等の得生を慥めぬ。嗚呼聖人にして若し和光同塵の僧たらざらしめば、我等の得生、何を以て心意を強ふせん。必ずや云はん、聖人は清らかなる持戒の僧侶にして、我等は肉食妻帯の俗塵に染たる無戒の野生たり、聖人設ひ浄土に得生するも、我等いかでか同じく得生せん。是れ實に我等の疑問なり。而して聖人は克く此疑問を氷解し、世の俗塵に染みて、我等をこそ御同朋御同行とかしづきたりけれ。そも四海兄弟五乗齊入は浄土教の教義にして、而も聖人は之が模範を示し給ひき。是に於てか我等の得生成る。

第二　聖人の生涯

その中

元久二年元祖選擇集を聖人へ附屬しぬ。眞宗の綱要、念佛の奥義、聖人獨り之を受得し、弘通益力めたり。光祖の門下三百八十餘人、群居すと雖ども、恐らくは自力の迷心に拘つて、金剛の眞心に昏きが致す所か、大師の正意を得る克はずして、空しく再び苦海に沈淪する者甚だ多く、報の浄土の往生は多からずと雖ども、化土に生るゝ衆生は甚だ少なからずといへり。

聖人一日、幾多の門侶と得生の眞因に就て、はかりなき爭論を爲し給ひぬ。其故は聖人が大師上人の御信心と、善信が信心と聊かばる所あるべからず。唯一なりと申しければ、善信房が大師上人の御信心と、我信心と等しと申さるゝと聞るは、いかでか等しかるべきと。聖人之に答へて曰く、なとか等れなし、申さるべきや、若し予が深智博覽に等しからんと申さばとし、誠におほけなくも恐らめ、されど往生の信心に至ては、一度他

力信心の理りを承りし以來全く私なし、そも大師上人の御信心も他力より給はらせ給ふ、善信が信心も亦他力なり、是を以て等しくしてかはる所なしと申すなりと、所論愈興に入りければ、大師上人まさしく仰せられて曰く、信心のかはると申すは自力の信にとりての他力の信心は善惡となり、即ち智慧各別なるを以て信亦各別なり、他力の信心は善惡の凡夫ともに佛の方より給はる者なれば、源空が信心も善信房の信心も、更にかはる所ある可らず、唯一なり、我賢しくて信ずるにあらず、信心のかはりあふて在しまさん人々は、我參らん淨土へはよも參り給はじ、よく〳〵心得らるべしとありしかば、彼等愈に、舌を卷き、口を閉て止みにけりとなん。蓋し善信とは當時棹空の字を略めたる聖人の名なり。

惟ふに事は一些話に屬すと雖とも、元祖及び宗祖を通じて、往生の眞因に實する教義を克く顯示して餘りなしと言はざる可らず。實に元祖を承繼し給へる聖人にして、而も聖人の信仰や誠に堅し。歎異抄に曰く、

親鸞にをきては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の子細なきなり。念佛は誠に淨土に生るゝ種子にてや待るらん、又地獄に落つる業にてや待るらん、總じて以て存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされ參らせて、念佛して地獄に落ちたりとも、更に後悔すべからず候、其故は自餘の行を勵みて佛になるべかりける身が、念佛を申して地獄に落ち候はゞてこそ、すかされ奉りてといふ後悔も候はめ、何れの行も及ぶ難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願誠に在しまさば、釋尊の說教虛言なる可ら

す、佛說誠に在しまさば、善導の御釋虛言し給ふ可らず、善導の御釋誠ならば、法然の仰せそらごとならんや、法然の仰せ誠ならば、親鸞が申す旨亦以て空しかる可らず候歟。疑する所愚身が信心におきてはかくの如し。

いかにそれ明快にして堅固なる、熱誠にして適切なる聖人の敎示、我等は之を感謝せざらんと欲するも豈に得べけんや。

元祖法然上人は淨土敎の弘通に遑なく、他力念佛の敎義、爲に天下に遍布して、貴さへ廢退せる聖道自力の敎旨は、愈衰頽を極め、座して自滅を招くの外無かりければ、彼等相謀りて、之を朝廷に訴奏する所ありき。承元元年聖人三十五歲にして、遂に大師は土佐に、聖人は越後に配せられ、わりなくも愛別離苦の事實を示現し給ひぬ。やがて聖人はこれ今生の暇乞にとて、大師に小松の御堂に謁して日

會者定離あり、とはかねてきいしかど、
昨日今日とは思はざりしを。

大師返歌し給はく、

わかれゆく道はるかにへだつとも、
心は同じ蓮花のうてなぞ。

聖人は既に配所に至りて居ること五年、自ら愚禿親鸞と稱す。赦を蒙り歸洛の途中、遂に建暦二年正月二十五日、大師上人涅槃の雲に入り給ふとの報を得て、聖人の悲哀一方ならず、倒れんヨりにて在しいましたれば、とて如何するすべもなく、再び越後に歸りて化を群類にぞ施しける。

嗚呼聖人の逆緣は却りて布敎傳導の好緣を結び、衰は京都の敎

界且らく跡を絶つが如しと雖とも、田舎の教線は之が爲に益範圍を擴張せられ、反向的に京都教界の隆盛を見るに至りしは、亦止むを得ざるなり。蓋し難行の小路迷ひ易きに依て、易行の大道に赴かんとしつゝあるは、正に是れ自下時勢の然らしむる所、他力易行の念佛は却て一天四海に溢れけり。

第三　聖人の生涯　その下

聖人は以來布教傳導に暇なく、元仁元年常州稻田の庵室にて、御本書の著作遊ばさる、名けて教行信證といふ。一部六卷、立教開宗の教旨實に此著書に存す。時に年五十有二。抑元祖法然上人は、我邦に於ける淨土教の大祖、眞宗の開立者にして、宗祖聖人も和讃に元祖を嘆じて曰く、

本師源空世にいでゝ
弘願の一乘ひろめつゝ
日本一州ことごとく
淨土の機緣あらはれぬ。

智慧光の力より
本師源空あらはれて、
淨土眞宗を開きつゝ
選擇本願のたなまふ。

又正信偈に曰く、

本師源空佛教を明にしつゝ
善惡の凡夫人を憐愍す、
眞宗の教證を片州に興し、

選擇の本願を濃世に弘む。

聖人は即ち之が繼承者にして、他力易行の念佛を弘通するありと雖ども、而も時勢の攪亂上自ら教化を異にせざる可らざる者ありて、聖人の立教開宗を仰ぐに至るも、亦自然の理りなるべし。何となれば元祖は聖道自力の諸稱に對して、南無阿彌陀佛の名號の一法を勸め、行々相對しての布教法なるに反して、聖人は自力の念佛に對し、信心の一法を勸化すればなり。卽ち世人が元祖の念佛の有信なるを知らずして、單に口稱の念佛なりと誤解したるにより、聖人は專心一意、かゝる口稱の念佛を排して、有信の念佛なるとを唱道し、以て信心篤本の教義を宣揚し給へるなりき。蓋し教行信證の著作ある所以なり。教行信證信卷序に曰く、

末代の道俗、近世の宗師は、自性唯心に沈みて、淨土の眞證を

貶す、一定散の自力に迷て、金剛の眞心に昏し。矣に愚禿釋親鸞、諸佛如來の眞說に信順し、論家釋家の宗義を披閱して、廣く三經の光澤を蒙り、特に一心の華文を開く。

されば教行信證六卷は眞宗開立の聖典なり。眞宗の肝要、念佛の奧義、之に攝在せずといふとなし。是を以て中興蓮如上人の、其著教行信證大意に記して曰く、

當流聖人の一義には、教行信證といへる一段の名目を立て、一宗の規模として此宗をは開かれたる所なり。此故に親鸞聖人一部六卷の書を作りて、教行信證文類と號して、委しく此一流の教相を顯はし給へり。然れとも此書餘りに廣博なる間、末代愚鈍の下機に於て、其義趣を辨へ難きに依て、一部六卷の書をつめ、肝要をぬきいでゝ、一卷に之を作りて、卽ち淨土文類聚

抄と名けられたり。

浄土文類聚抄とは即ち後年聖人の著作し給ふ所なり。

聖人東北の地に在ること前後廿九年、嘉禎元年八月を以て漸く京師に入る。時正に六十三歳の老を告ぐ。以來二十餘年、專ら著作を事とし、東國の門人亦常に來が問す。其著和讃、浄土文類聚抄、愚禿抄等は其最も主なる者にして、其他の小部殆と數ふるに遑あらず。

翌て亀山天皇弘長二年十一月下旬、聖人微恙を得、同く二十八日午の時、頭北面西右脇に臥し給ひ、終に念佛の息絶え在しぬ。壽九十歳。洛東鳥邊野の南の邊り、延仁寺に之を火葬し、遺骨を拾ひて、同じき山の北の方、大谷に之を收め、後佛閣を立て影像を安ず。されば終焉にある門弟、勸化をうけし老若は、各在世の古へを懐ひ、滅後の今を悲みて、戀慕滂泣せざるなしと雖とも、幸に聖人の形見たる教行信證以下の著書ありて、大に我等の心意を強ふするに足る。

聖人の歌に曰く、

戀しくは南無阿彌陀佛を稱ふ可し、
我も六字のうちにこそすめ。

我等若し聞其名號信心歡喜、南無阿彌陀佛の謂れを聞て、信心を決得しぬれば、即ち是れ正に聖人に謁するとを得たる者。思へ、我等何ぞ聖人の入寂を悲しまん。蓋し南無阿彌陀佛の一法、既に四海に遍布せられたればなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

聖人の滅後大谷の廟所は、季子彌女、後に覺信尼と稱する者、其子覺慧と共に之を守衛し、亀山天皇勅して久遠實成阿彌陀本願寺の號を賜ふ。時に聖人の子善鸞、故ありて奥州大網に在り、依て覺信

尼は善鸞の子如信を召して法嗣となし、寺務を司らしむ、次で覺慧の子覺如を以て法嗣となし、之を第三世とす、是に至て本願寺方に成る。是より先き聖人は上州に高田專修寺を建て、上足の弟子眞佛上人を其住職となし、中興眞慧上人を經て以て今日に至る、蓋し高田派專修寺是なり。されば專修寺は其法統にして、而して本願寺は血統に法統を兼有する者なり。

以來本願寺の教勢漸く衰頽に赴きしも、中興蓮如上人の偉大なる功績と、無比の盡瘁とに依て、之が改復を企圖せられ、以て現今の繁榮を見るに至る。嗟畏てくも、今上天皇陛下、明治九年、勅して聖人の謚を見眞大師と賜ふ。誠に所以ある哉。

第四　聖人の教義

聖人の教義は主に其著教行信證に顯れたり。彼に從へは、先佛教を分て大小二乘となし、更に大乘を分て頓教漸教となす。而して漸教を竪出横出に分ち、法相宗の如き歴劫修行の教は即ち竪出にして、淨土假宗の要門及び眞門は即ち横出なり。又頓教を竪超横超に分ち、天台、華嚴、眞言、禪の如き即身成佛の教は即ち竪超にして、淨土眞宗の弘願は即ち横超なり。之を聖人の二双四重の判釋といふ。

次に要眞弘の三門は、順次に第十九願、第二十願、第十八願の三願、觀經、小經、大經の三經、邪定聚、不定聚、正定聚の三機、雙樹林下往生、難思往生、難思議往生の三往生、懈慢、疑城、報土の三土に配するを得べく、之を聖人の三々の法門といふ。從て教行信證の四法は眞假二種に分れ、弘願眞實の行は南無阿彌陀佛にして、信は至心信樂欲生、要門方便の行は萬善諸行にして、信は至心發願

欲生、眞門方便の行は稱名念佛にして、信は至心回向欲生なり。教及び證は前に示す如く、三經及び三土なりとす。聖人は卽ち聖淨二門の廢立の上に、又眞假二門の廢立を加へて、以て淨土眞宗の教義を搆成したりけり。

教行信證の第六卷には要眞二門を明し、前五卷には弘願眞實を示す。眞實の四法とは何ぞ、曰く彌陀の本願名號を開陳したる大無量壽經の教に依て、本願の名號南無阿彌陀佛の所稱を聞き、深く之を仰信するや、必ず涅槃の證果を得べきなりといふに在り。之を要するに、吾等凡夫は罪惡の塊りにして、而も纖弱微劣、いかに身心を苦勵するも、到底眞如の理を證得する克はざるを以て、西方淨土の阿彌陀佛は、慈心よりかゝる凡夫を救濟せんと思ひ立ち、甚だ永き思惟と、少なからざる修行とに依て、遂に我等の得生すべき南無阿彌陀佛の因種を搆成し給ひき。我等聞信の一念に、此因種を佛の方より廻向せしむれば、我等成佛の能事茲に全く終り、現世に於て尙ほ且つ、より高等の伴侶に入るを得、人倫を亂さず、國民の義務を缺かず、榮譽ある人として壽盡きなんとき、卽ち西方の淨土に生れて、佛果涅槃の證りをこそは開くべけれ。是故に其著淨土三經往生文類に曰く、

大經往生といふは、如來選擇の本願、不可思議の願海、之を他力と申すなり。卽ち念佛往生の願因に依て、必至滅度の願果を得るなり。現生に正定聚の位に住して、必ず眞實報土に至る。此は阿彌陀如來の往相廻向の眞因なるが故に、無上涅槃の證りを開く。之を大經の宗致とす。

又歎異抄に曰く、

彌陀の誓願不思議に助けられ參せて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひ立つ心の起るとき、即ち攝取不捨の利益に預けしめ給ふなり。彌陀の本願には老少善惡の人を擇ばず、唯信心を要とすと知るべし。其故は罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を助けんが爲の願にて在す。然れば本願を信せんには他の善も惡にあらず、念佛にまさるべき善なき故に。惡をも恐る可らず、彌陀の本願を妨ぐる程の惡なきが故にと。

念佛申さんと思ひ立つ心の起るとき、早く既に成佛の因定るは如何。曰く、是れ即ち得生の因は信心にして、其後口に稱ふる念佛は佛恩報謝の經營たればなり。御消息集に曰く、

往生一定と思ひ定められ候ひなば、佛の御恩を思召さんにはてと事は候ふ可らず、御念佛を心に入て申させ給ふ可しと覺え候、

聖人の教義は此の如く純粹他力の平民的宗教なるを以て、宗風亦大に他に異る所無くんばあらず、即ち佛戒に依て宗徒を制し、世の俗塵を脱するに非ずして、無戒無律の上に宗規を立て、愈俗に入て、唯世間普通の道義を履行するのみにて足れりと教示せられたり。蓋し過去の佛教倫理が、妄に平等的世界主義の一邊に片寄り來れるを以て、聖人は特に差別的國家主義の分子を加へ、以て平等と差別との融和的倫理主義を唱道したるなり。是れぞ即ち眞宗に於ける眞俗二諦相依の教義にてあるる。

* * * * * * * * * * * *

大聖釋迦牟尼佛は、印度に現はれて教を布き、龍樹、天親と、曇鸞、道綽、善導と、源信、源空とは、印度、支那、日本の三國に出で、其教をつぎ、他力念佛の教義は、我等の耳朶に接せざるに非ず

と雖ども而も宗祖親鸞聖人の我邦に出現ましますなくば、我等いかでか容易に此教義に接觸するを得ん。必ずや迷ひ來りし我等罪惡の凡夫は、再び苦海に沈倫して、救濟さるゝの時なけん哉。されを幸に我等は、聖人の恩澤に沐浴するを得、他力念佛の教義にあふとを得たり、歡喜何ぞ堪えん。偶信心を獲て、遠く宿緣を慶ぶとは、豈に唯聖人の述懷のみならんや、我等則ち然り。嚮に我等若し彌陀大悲の光明に涵養せらるゝなくば、焉んぞ阿彌陀佛の福音を、聖人の教示に聞くとを得んや。嗟彌陀の福音は眞善美なり、聖人の功績は偉且大なり、我等此鴻恩を蒙る、いかに之に報いん哉。聖忌第六百五十年の十年前之を記す。再拜。

見眞大師 終

複製不許

明治三十四年十一月三十日印刷
同 年十二月 日發行

著述者 船橋水哉

發行兼印刷者 森江佐七
東京市麻布區飯倉町五丁目四十六番地

發行所 東京市飯倉町五丁目四十四番地 森江書店

大賣捌所 東京本郷春木町二 森江分店

◎森江書店發賣略書目◎

- 南無（大内青巒述（ふりかな付き））　全一冊　正價金三錢　郵稅金二錢
- 佛陀の教訓（加藤咄堂述（ふりかな付き））　全一冊　正價金三錢　郵稅金二錢
- 信心（大内青巒著（ふりかな付き））　全一冊　正價金三錢　郵稅金二錢
- 大黑天（高田道見著（ふりかな付き））　全一冊　正價金三錢　郵稅金二錢
- 信佛の栞（加藤咄堂述（ふりかな付き））　一枚摺十枚に付き　正價金二錢　郵稅金二錢
- 大乘佛教百話（同氏著）　全一冊　正價廿五錢　郵稅金四錢
- 靈界の偉人（皓々洞編）　全一冊　正價卅五錢　郵稅金四錢
- 佛教の女子（山田文昭著）　全一冊　正價卅五錢　郵稅金四錢
- 觀音經講義（來馬琢道師述）　全一冊　正價金十錢　郵稅金二錢
- 佛遺教經講義（大内青巒述）　全一冊　正價金廿錢　郵稅不要
- 通俗般若心經講義（同氏述）　全一冊　正價十二錢　郵稅不要
- 觀音經和訓圖繪（山田憨齋長述）　全三冊　正價卅五錢　郵稅金六錢
- 御詠歌略註（同師著）　全一冊　正價十二錢　郵稅金二錢
- 佛陀の福音（西國三十三所　廣道哲學博士ケーラス氏鈔木大拙譯）　全一冊　正價七十五錢　郵稅金六錢
- 四恩略辨（吉堀慈恭著）　全一冊　正價十五錢　郵稅金四錢
- 佛教和讃三百題（蓮窓居士著）　全三冊　正價卅五錢　郵稅金四錢
- 護法賢聖傳（石村貞一著）　全二冊　正價三十五錢　郵稅金六錢
- 鐘の由來（高田道見著（ふりかな付き））　全一冊　正價金三錢　郵稅金二錢

教海の新光明

文學士春日圓城序文
舟橋水哉編輯

全一冊　定價金三十五錢　郵稅金四錢　製本頗美

布教家の材料として將た文書傳導の模範として廿世紀の新天地に適應する者は蓋し本書なりと謂はざるべからず

本書は知名の諸士が各特異の才を振ひ或は監獄に軍隊に或は青年に婦人に少年に或は貴顯紳士に學生に諸種の方面に向て教線を布かれたる者添ゆるに佛教趨勢上の統計を以てす是れ即ち本書の特色なり

京都法藏館發行

A-2

舟橋水哉著

偉人源信

本邦中古の偉人源信母子の生涯を記述せる者即ち是れなり源信母子實に家庭の好模範者たり目下家庭の紊亂甚だしき時に當て好箇の偉人源信母子の生涯を知る亦可ならずや

全一冊　定價金十五錢　郵税金四錢　製本優美

京都法藏館發行

磐察輯錄

説法因縁　除睡鈔

本鈔が説教演説家の錦嚢として彼の砂石集又は雜談集に比し最要の材料集なりと稱せられつゝあるとは今更改めて辯ずるの必要を見ざるなり乞ふ一讀して座右の寶典とせらるべし

全三冊　正價金五十錢　郵税金六錢

見眞大師

舟橋水哉

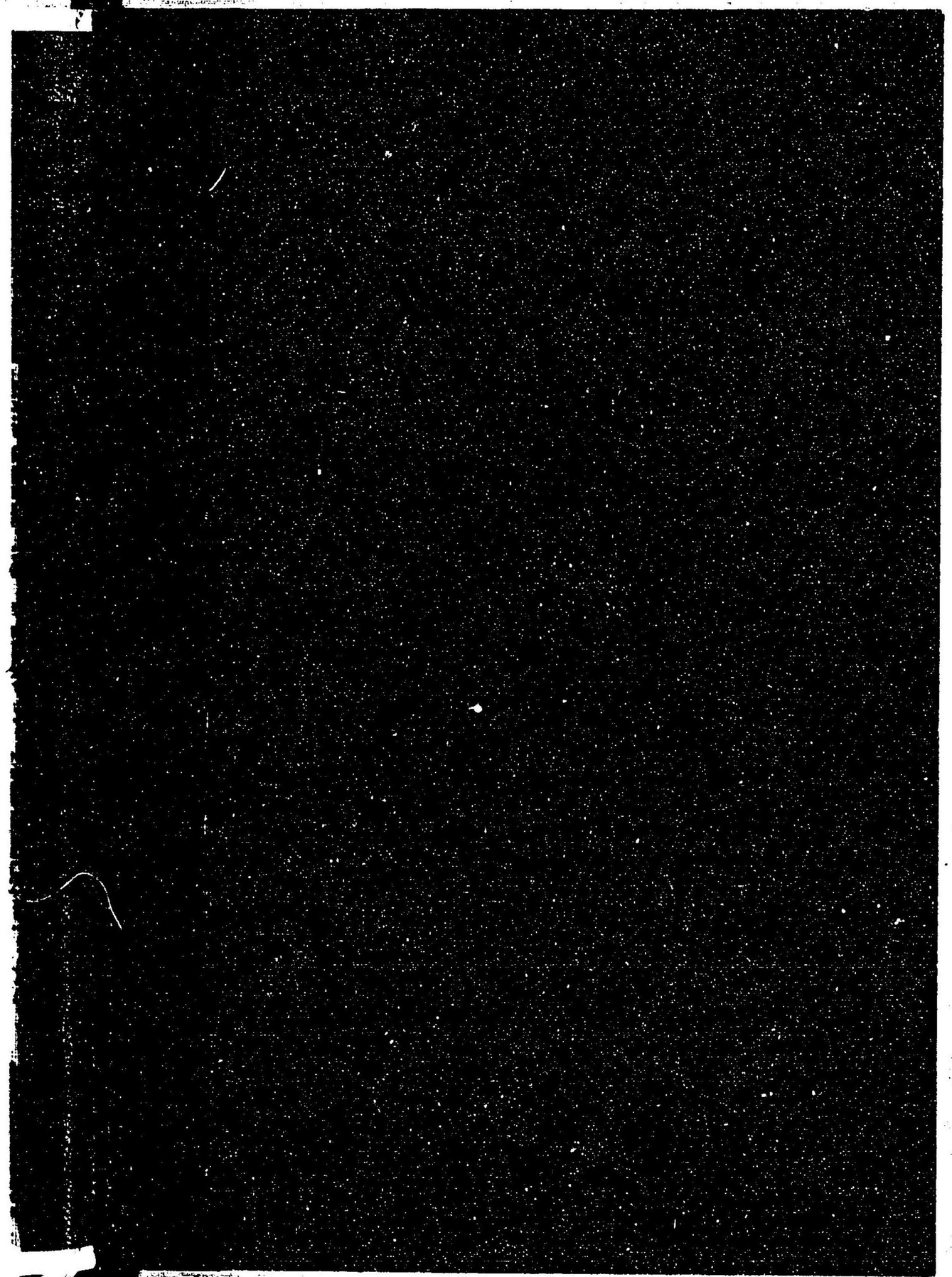
国立国会図書館

017716-000-9

特47-813

見真大師

舟橋　水哉／著

M34. 12

ABF-0624